

朝の公園

小川未明

青空文庫

それは、さむいさむい朝あさのことでした。女じょ中ちゆうのおはるは、赤あかいマントをきた、小ちいさいお嬢じようさんをつれて、近ちかくの公こう園えんへあそびにきました。そこはもう、朝あさ日ひがあたたかくてつっていたからです。公こう園えんには、ぶらんこがあり、すべりだいがありました。もう子こ供どもたちがあつまつて、笑わらったりかけたりしていました。

小ちいさいなお嬢じようさんは、ひとりであそんでいました。おはるはベンチに腰こしをかけて、もつてきた少しょう女じよ雑ざつ誌しを讀よんでいました。いなかにいるときから、本ほんを讀よむのがすきでありましたので、こちらへきてからも毎まい月げつのお小こづかいの中なかから雑ざつ誌しを買かつて、おしごとのおわったあととか、ひまのときにはとり出だして、讀よむのをたのしみにしていたのであります。

いま、おはるは、その雑ざつ誌しにのつている、少しょう女じよ小しょう説せつをむちゆうになつて讀よんでいました。あわれな家うちがあつて、感かん心しんな少しょう女じよが病びよう氣きの母は親おやと弟おとうとをたすけてはたらく話はなしが、かいてありました。しばらく、雑ざつ誌しに目めをおとしてかんがえこんでいると、ふいになきさけぶお嬢じようさんの声こえがきこえました。おはるは、はつとして立たちあがりました。見みると、お嬢じようさんはすべりだいからどうしておちたものか、泣ないているのです。

「まあ、どうなすつたのですか？」と、おどろいてとんでいきました。

が、おはるがとんでいくよりも先に、みすぼらしいはんてん着の男がかけよって、お嬢さんをだきおこしてくれたのでした。

「おお、いい子、いい子。」といつて、その男はなだめていました。

「ありがとうございます。」と、おはるはお礼をいって、

「お嬢さん、ころんだのですか、どこか痛くって？」とききますと、ちよつとおどろいたばかりとみえて、べつにけがはなかったようです。

おはるは、安心しました。そして、さっきの男の人をみると、むこうのベンチにもどつて、ゆうべからこうしてじつとじているらしく、両腕をくんでうつむいているのでした。

「きつと、とまるところがなかったんだわ。」

おはるは、このごろ、宿がなくて公園で夜をあかすあわれな人のあることをきいていました。それで、その人もそうであろうと思つたのです。

おはるはお嬢さんをだいて、むこうがわのベンチに腰をおろしました。そして思いだしたように、ときどき、そのあわれな男のようすを見ていました。男はそんなことに気のつくはずもなく、いつまでもじつとしてうなだれていました。

「しごとがないのだろうか？ それとも、年をとって、しごとができないのだろうか？」

いろいろのことを考えながら見まもっているうちに、いつか自分の父親のすがたが、目にかんできました。気のせいか、あの男のすがたのどこかにお父さんと似たところがあるようです。

「きょうだいもない、子供もない、ひとりものなのかしら？」

そう考えているうちにおはるは、故郷ではたらく両親のすがたが、まざまざと目に見えるような気がして、この暮れにはなにかお父さんやお母さんのすきそうなものをおくつてあげようと思つたのでした。

「さあ、おうちへかえりましょう。そしてまたあとであそびにまいりましょう。」といつて、おはるはお嬢さんの手をひいて、おうちへかえりかけました。

公園の花壇は霜枯れがしていて、いまは赤く咲いている花もありませんでした。けれど、黒いやわらかな土からは、来年さく草花の芽が、もうぷつぷつとみどり色に頭を見せていたのです。公園を出るとき、おはるはもういちどふりむいて、あのルンペンのような男を見ました。男は、やはり動かない置きもののように下をむいて、じつとしてい

ました。

ちようどその日の、昼ごろのことです。おはるがおつかいに出ると、公園のそばで子供たちが、いまルンペンらしい男が、たおれていたのを巡査さんがつれていったと話していたので、おはるは、もしやさっきお嬢さんをだきおこしてくれたしんせつな男ではないかと思つたので、

「あんた、その人を見たの？」と、子供の一人にききました。

「見たよ。はんでん着でみじかいズボンをはいて、黒いぼうしをかぶっていたよ。」と、その子供はいいました。

「まあ！ その男は死んでしまつていたの？」

おはるは、たしかにさっきの男であるとかると、きゆうに頭の中が、かわいそうな気持ちでいっぱいになりました。

「さむいのになにもたべないので、おなかがすいてたおれたんだって、巡査さんがいつていたよ。だから、死にはしないだろう。」と、その子供はこたえました。

「どこへつれていかれたの？」

「さあ、どこだか。」

子供たちはすぐにそんなことはわすれてしまったように、たこをあげたり鬼ごっこをしたりしていました。

おはるは、用事をすまして、おうちへかえると、自分がしまっておいたお給金のなかから、五十銭銀貨を一枚とりだしました。そして、紙につつんで交番の巡査さんのところへもつていききました。

「どうかこれを、公園でたおれたきのどくな人へあげてください。」といつて、さしだしました。

巡査さんはふしぎそうにおはるの顔を見ましたが、おはるが今朝からの話をしきのどくでならないからといいますと、巡査さんもうなずきながら、

「感心なお志です。たしかにとどけてあげます。どんなに喜ぶかしれませんよ。」といつて、こころよくひきうけてくださいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷

1983（昭和58）年1月19日第6刷

初出：「台湾日日新報」

1935（昭和10）年12月28日

※表題は底本では、「朝《あさ》の公園《こうえん》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2015年5月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

朝の公園

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>